

自律協生社会の実現を目指して

人や自然やテクノロジーとの関わりの中で、個人の主体性や創造性が発揮される、生き生きとした喜びに満ちた社会のことを自律協生社会（Convivial Society）と私たちは呼びます。武蔵野美術大学と日本総合研究所は、昨年度からこの自律協生社会を実現するための共同研究を行っています。ここではプロジェクトを統括する若杉教授と日本総合研究所の井上氏が、リサーチのなかから見えてきた課題について探ります。

武蔵野美術大学 教授

若杉 浩一

株式会社日本総合研究所 エキスパート

井上 岳一

都市と地方、専門家と市民の格差を超えて

井上 若杉さんはシンクタンクと組むってなったときにどう思いました？

若杉 僕が広告代理店とシンクタンクが嫌いな理由は、一つは地元の人からすると都市の英知を振りかざして「確かにそういうのが必要だね」って思い込ませて、その知的量産モデルで地域を思考停止状態にしてしまうから。それでやった気になると、今度はそれに依存してしまうわけですよ。これは破壊的だなんてずっと思ってたんです。東京から見ればこっちの方が豊かに見えるのに、自分たちの美意識を自ら破壊していくっていうようなことが、全国で起こっている。

井上 デザイナーも似たところがありますよね。

若杉 そういった意味ではそうですね。デザインやクリエイティブもある種の危険性を帯びてるんですよ。

井上 シンクタンクやコンサルティングって「知識の格差」を利用して生きているところがあって、それは都市と地方の格差を利用して、都市の連中が食ってるっていう構図そのままなんです。"デワノカミ"的に、「海外では」「最新の理論では」と、とにかく最先



端の知識を得てそれである種の脅しをかけるっていうのが一般的なシンクタンクやコンサルのモデルですよ。それは、東京が地方に対してもっと東京的にならないと駄目だよって言ったのと全く同じなわけです。僕自身は、ただ知識を与えるだけではなくにも変わらないなってことを痛感してきたのですが、デザインには物を売れるようにするとか状況を動かす力、マジックを起こせる可能性がありますよね。知識ではそういうマジックは起こせないんです。

若杉 なるほど。

井上 知識を授けるモデルをやめて、一緒にものを考えるモデルにしてから少し楽しくなったのだけど、一緒に考えてるだけではその先を動かせない。その先を動かす時には形にする力が必要で、それがデザインの強みだと思うんです。社会が課題を抱えてる中で、状況を変えなきゃいけないというときにデザインやアートの力が欲しかった。話し合ってるだけじゃなくて手を動かしながらだとまた状況が変わってくるということもあるから、つくれる人と一緒にやりたかったんです。

若杉 さっきも学生と、どうやったらその地域の人たちの美意識や自己肯定感、あるいはコミュニティが生成されるのかみたいな話をしたときに、何か一緒に物をつくったり、一緒にご飯食べたりみたいなことの中で、一体感とか共感が生まれることが多いですよ。ねっ

て話をしている、本当にそうだと思うんですよね。こうすれば共感が得られるんだみたいな知識よりも、自分たちの活動の中から得られた実感が一番強い。本来は地域はそういう経験を持っていたはずなのに、経済を優先するがゆえに失っていったってことなんだと思います。

井上 それは企業も同じで、一つの企業の中でも考える人と現場の距離が離れ、業態も細分化されてしまった。システム化が進んだがゆえに、一緒に考えて手を動かし、何かを実現していくということが失われてしまったというのはありますよね。

若杉 なにをつくるにしても、誰かに手を借りなきゃいけない構造になってしまっていて、共同体もないからお金で解決するしかなくなってしまってる。昔は地域に大工の棟梁がいて、仕入れも全て地域で賄えたわけじゃないですか。それが、自分達の暮らしすら自分達でつくれなくなってきた。

井上 地域を盛り立てていきたいというのはもちろんあるけど、別に地域だけではないんですよ。人口が減っていく中で、都市部だって官と民と産業界が新しい共同体を作り新しい役割分担ができるように変わっていかないといけないときに、みんなその変わり方がわからないから、小さくてわかりやすい単位で実験みよう。そういう意識で地方の町に入っているわけで。

若杉 その通り。大きな組織を動かそうとすると年月ばかりかかるから、自分たちでものをつくっていくプロセスを実体化できるのは、ある程度小さなユニットなのではないかと思っています。

井上 僕が今苦戦してるのは、小さいユニットの受けの悪さ。例えば地方の小さな町でやります、というのはあんまり受けが良なくて、これが政令指定都市になると途端に反応が変わる。今僕は小さいけど具体的な形を起こしていくということに価値を感じてるけど、それは評価されにくい。企業や政府は、より大きな成果を見せたがるという一発逆転の性向があるから、その考えはどうやったら変わっていくのかなというのは悩みますね。

若杉 井上さんも言ってるけど、最初でドーンとお金をもらうのではないのだと。最初に計画したものは、ある種のエンジンで、それだけ残してさよなら〜っていう話じゃなくて、それが人を乗せて自走し続けなければならぬ。そこでのフィーは小さくても、時間軸で考えればちゃんと対価を得られるし、多分そのモデルはネットワークされていくんですよ。そのときにそのネットワークをきちんと持つてるところが一つの強みになっていこうなと、僕は思ってるんですけどね。

井上 それが僕らの言う、“Small Business, Big Relation”で

すね。

自己表現できる場の重要性

井上 アートやデザインがいいのは、大抵のエリート層はそこに苦手意識をもっているということです。直接的な身体性を伴った表現が苦手だから、絵が描ける人に対してめっちゃ憧れを持ちやすいし、言葉や数式の勝負では対抗意識を持っちゃうけど、絵が描ける人には無条件に感心するし、肯定しやすい関係性になれると思うんです。

若杉 僕はデザイナーとして地域に行ったときに、自分が絵を描いてしまうことの問題を感じていて、地元の人からすると何かを表現してくれんだと期待されてしまう。なので途中で筆を止めて、あなたたちが描いてくださいよと言う。正直言って僕が描く方が、速度もクオリティも上なんですけども。そういうことじゃなくて、自分達がつくったものだから大切にしたいって思う、そのことの方が遥かに自走するエネルギーになるはずなんです。素人がつくったものってダサいって思われるかもしれないけど、彼らが生み出したものは時間をかけて洗練されていくんですよ。

井上 本当そうですね。今日本総研の若手を天草に連れていってるんだけど、彼らは資料をつくってくださいという誰よりも早く資料作れるんですよ。それを地元の人の前で読み上げるんだけど、誰も聞いてない（笑）。圧倒的な情報量で思考停止させてしまうんですよ。やっぱ上から知識を授けたり、資料を作る癖が抜けないんです。ただそういう部分もこれから現地の人と一緒にやっていくうちに変わっていくし、地域の側もより主体的に関わってくるようになるのだらうなと。そうなったときに初めて、誰が上でも下でもない、お互いにともに力を合わせながら動く、自律協生的世界になっていくんだと思います。今は都市と地方、プロとアマチュアの間でやっているそういう動きを通じて、行政と産業界と市民の間にある壁を崩していきたい。

若杉 そうそう、それやりたい！

井上 ただ、なかなか役所がついてこないですよ。

若杉 役所というか、なんか自分を「封印している」人がいる（笑）。自分らしさっていうのは封印しないと、組織内ではうまく立ち回れない。だから自分の主義思想を封印する。だけど、同じ思想をもった人たちが現れて一緒にやるかってなれば、その封印から解放されるんですよ。どうやったらそういう機会をつくっていけるのかっていうのも課題ですね。

井上 そうなんですよ。僕も含めて受験勉強をしっかりとやってき

た人たちは、正解かどうか分からないものは怖くて手が出せない。正解のものしか提出してはいけないと思ってるから、自分を表現するということがなかなかできないんですよ。

若杉 ああ、それはあるかもしれん。

井上 役所、官僚機構は失敗を許さない、正解だけで成り立っている場所。そこで自分を表現して踏み外してしまったら、お前は失敗作だと言われる。だからみんな品行方正な振る舞いをして、その実どこかで自分を押し殺しているんじゃないですかね。もっといい意味で公私混同するべきなんだけど、そうすると後ろ指を指されて出世できないし、マイノリティになっちゃうという構造が企業社会にもあります。自律協力的な社会は、自己を表現しながら生き生きといういろいろなものと関係をつくって生きていこうという社会なわけで、それを実現しようといった時に心の問題は大きいと思う。

若杉 それは大きい。稚拙でもいいから、表現するのが楽しいと思えるような場づくりが重要ですよ。

ローカルコレクティブの可能性

井上 この前うちの学校に行っていない小6の息子と2人で話して、彼は学校に行くことに不安を感じていてなかなか一步を踏み出せない。でもさ、自転車だったら何度転んでも立ち上がって漕ぎ始めるよね?って訊いたら、それは、体の傷は大したことないからって言うんですよ。要は、心の傷に対する不安が大きい。やっぱりみんな傷つくことを恐れてるんだけど、表現者の人たちはそこ闘いながらやっていくわけじゃないですか。どうやったら不安を乗り越えられるんだろう?

若杉 僕ら表現者は、逃れたくてもそこから逃れられないですよ。自分の作品やデザインも自分自身なんだけど、つくっているプロセスのなかで、批判や売り上げ、あるいはクライアントの評価もついてくる。そういった意味で常に自分をさらけ出していることは大きいかもしれないですね。

井上 学生はまだ表現を始めたばかりじゃないですか。そういう子たちが恐れずに自分をさらけ出していくには何が必要なんだろう?

若杉 単純な話で、自分で選んで表現したものを、相手が受容してくれたっていう喜びです。つまり、自己をさらけ出し、それを受容してもらえた喜びによって、主体性が芽生える。だから学生には大学時代にそういう経験の一つでもしてもらえたら僕は思ってるんですけどね。

井上 人間が恐れずに自己表現していくようになるにはそういうも

のが必要だとしたら、いろいろなコミュニティのしがらみで自己表現できずにいる人たちを解放するにはどうしたらいいんでしょうね。

若杉 井上さんの言葉を借りると、寺子屋とかローカル・コレクティブみたいなものに可能性があると思います。要は、自分の組織じゃないもう一つのコミュニティの中で、自分の本質的なスキルや可能性が受容され、その中で強い自己肯定感が生まれていくような気がするんです。

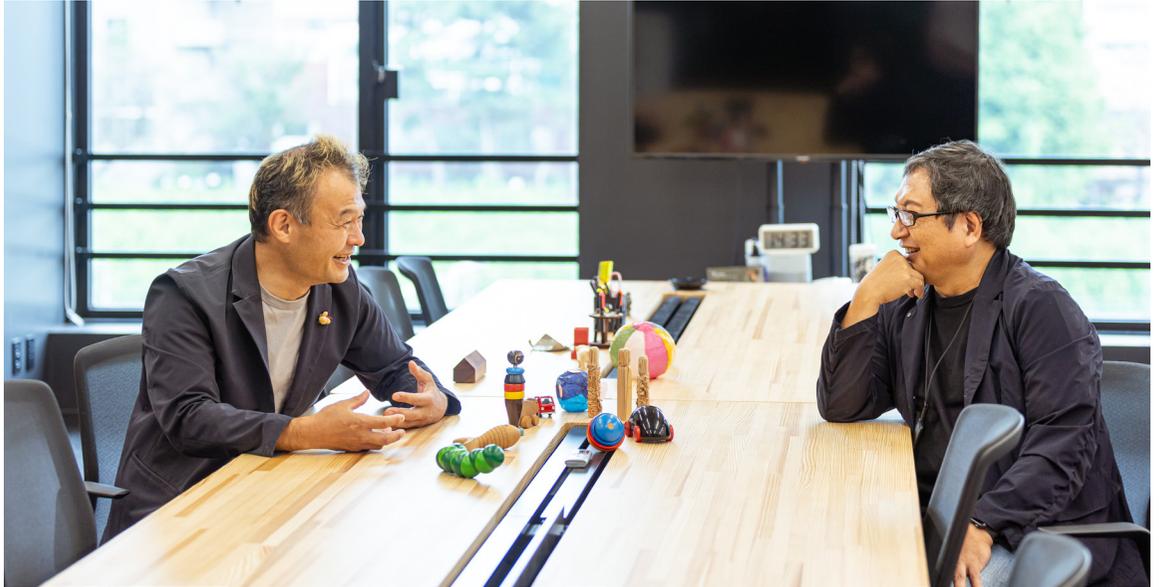
井上 地域に出ていっているムサビの学生を見ると、「旅の恥はかき捨て」的なところを感じます。自分の普段所属してるコミュニティではないところだから、無責任というか自由になれる部分がある。演劇の舞台でなら恥ずかしげもなく演技できるというのと一緒に、違う舞台を与えられたときに、普段の役割から自由になると。

若杉 そうです。一つのフィールドしかなかったら、そこで失敗したら終わりじゃないですか?だけでも一つのフィールドでは、馬鹿な自分をさらけ出してみんなに受け入れてもらって自己肯定感が高まっていき、「ひょっとしたらこれもありかも?」みたいにもう一つの自分が立つってということが重要な気がするんですよ。

井上 「お祭り」って結構それに近かったんじゃないかな?普段はポンコツな人が神輿の上に乗って踊り狂って「すげえ!」みたいなことあるじゃないですか。でも今そういうものがなくなっちゃって、全てがシステム化されてる。そうすると、都会の学生が地域に行って違う舞台で羽ばたいていくというモデルはあっても、地域の官僚や企業の人は羽ばたけなくて鬱々としていますよね。そういう人たちに違う舞台を与えるにはどうしたらいいんだろう?

若杉 一つは、例えば、自分たちのなりわい以外の場所にもう一つフィールドをつくるっていうのがありますよね。ひょっとしたらその地域の中では羽ばたけないってなったら、場所を変える必要があるかもしれないし、同じ場所でも俺たちみたいな外野がいる場所では羽ばたけるかもしれない。こういう異種との交流や表現が繰り返されるフィールドが絶対必要なんです。「どっかで転んでも、どっかで受け入れられる」。こういう社会システムがみたいなものが必要だし、もしかしたらそれは寺子屋とかローカル・コレクティブっていう言葉で表されるのかもしれないと思いますね。

井上 「コレクティブ」と言ってるのは、今までの「コミュニティ」とは違う成り立ちであることを強調したいからで、それはその人の日常の役割だけではなく、自らを解放できる、違う役割の場を用意しておくということなんでしょうね。



その土地を引き受ける覚悟とその未来

井上 さて、プロジェクトも1年目が終わったところで、2年目はどこに力をいれていきましょう?

若杉 2年目はいよいよ共につくり上げていくチームづくりが始まっていくんじゃないかと思いますね。

井上 そうですね、企業の人たちも巻き込みながらコレクティブをつくり、実践的な活動に結びつけていけたらいいですよ。

若杉 そういう兆しはもう既にあるじゃないですか?来年度は、そこに賑わいや暮らしをつくっていくっていうふうになれば、小さなモデルが色々ところで起こってくる。そのプロセスにたくさんの人たちが参画してくれて、そのモデルを広げてくれれば、“Small Business, Big Relation”が出来上がるように思うんですよ。

井上 個人的には、これまで僕らが出会って話を聞いてきた人たちの話を記録し、発表していくことにも挑戦したいですね。身体化した情報として可視化するみたいなことができたらなど。

若杉 面白いじゃないですか、「世の中はこうなるのだ」という本じゃなく、淡々と記録しているものの中に新たな未来が見えるっていう。それは井上さんにしかできないデザインかもしれない。僕は「未来洞察」って手法としてあるけれど、未来はシンクタンクや行政がつくるものではなく、俺たちだって未来の絵を描けるのだ、みたいなダイナミックな実践をどんどん形にしていきたいと思ってるんです。何か未来のようなものが見えてくると、みんながこぞって話し

始める、つまり表現をし始める。自分達が住んでいる場所に自己表現できる場をつくっていきたいんです。

井上 そうですね。手法としての未来洞察の問題点は、未来が何か括弧に入ったものになっちゃうってことなんじゃないかな。

若杉 連続してないわけだ。

井上 そう、現在と連続した未来を描ければいいんだけど。林業とかをやってる人たちが感じている未来って、何か遠くにあるものではなくて、まさに自分が引き受けるその土地そのものというか、引き受ける覚悟そのものが未来なんだと思うわけです。

若杉 なるほどね、いいこと言いますね。

井上 自分の代でできないことは、次の代に託していく。引き受けて託すっていう、これが未来をつくっていくことかなと思う。そのためにも、私はここに根を張って生きていくんだって覚悟が必要だと思うんですよ。だけど、今はみんなそれが持てないから、地域の人たちも、ここが東京のようにならないかなとか、そんなことばかり考えちゃう。「一人一人が未来をつくれる」とは思えなくとも、何かを引き受けて生きていくというのは覚悟の問題だし、そういう覚悟を持つ人が増えると面白いことが起こるんだと思う。

若杉 それはいいと思いますね。そういうところにデザインが関われば、とても素敵だと思う。